

## みどりへの想い

笠原 壽一 福島県福島市 七十七歳

母ちゃんへ、あの時の想いを今届けます

母ちゃんが、病院へ通うバス停までの緑に囲まれた道が好きでした

一緒に暮らしながら、よんどころない病ゆえ、胸に抱かれたり手を握ることすらできなかった母ちゃんでしたが、緑が大地を覆い、他人の視線を遮ってくれたこの道だけが、母ちゃんの着物にすぎることのできた一つの空間でした

母ちゃんを乗せたバスが、緑の彼方に隠れるまで夢中でガソリンの臭いを追いかけてました

それから夕方まで、いつ来るともしれないバスを待ちながら神社の森の中を歩きまわり、一番大きな百合の花を手折り待っていたのです  
夕暮れの赤い太陽を背中にしてバスが到着し、砂ほこりの中から笑顔の母ちゃんが現れました

「としぼー待っていてくれたのかい。百合の花奇麗だない、ありがとない」

その一言がどれほど嬉しかったことか、百合が香ると思い出します

帰りの道すがら、母ちゃんの着物の袖に纏まり、この日の出来事を何でも話したかったのです

何時もは遠い家までの距離が、無常にも近いことを怨みました

家に着くと、母ちゃんは百合の花を受け取り奥の部屋に入り、出てくることはありませんでした

又あのむせ返るような香りの季節がきました

白い服を着てマスクをした無機質な人が家の中から周囲まで消毒していきました

その日から母ちゃんの姿がなくなりました

家からバス停までの緑に囲まれた田舎道

そこだけが今残る天国への母ちゃんとの「みどり」の思い出です